煌く星々を探して。

水上羚（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
煌く星々を探して。

【Ｎコード】
Ｎ３０７４Ｎ

【作者名】
水上羚（みなかみれい）

【あらすじ】
これは、「終わりなき歴史と繰り返される過ち。」の続編です。
基本的に毎週月曜日更新。タブンネ！

人物紹介

人物紹介

主人公たち

川村アリサ　本名　有川さつき（アリカワサツキ）　１６　女　１５５ｃｍ　４０ｋｇ
顔立ちは綺麗なほうだが平凡で普通と言われるくらい。
感情をだすことはまれで、口数も極端に少ない。
どこか感情表現を避けているふしがあり、苦手とする。
むねくらいまでのまっすぐな黒髪。
濃い色のサングラスで瞳を隠していて、同タイプのものを大量所持。
白いラインが三本はいった紺色の冬のセーラー服。
紺色のカバンをひもを調節しリュックタイプや肩掛けタイプにする。
夏服バージョンはカラーリングが逆。夏冬問わず紺色のスカーフをリボンのように結ぶ。
刃以外が漆黒の剣をどこからともなくだしたりする。
その他、仕込み武器、銃器系統を隠し持つ。
いつも不機嫌そうな顔をしている。本当はそうじゃなかったりするが、くせ。

ジュエル　本名　立花玉菜（たちばなたまな）　女　１６
絶対音感の持ち主で聴いた曲を間違えずに再現可能。
学校の制服の紺のブレザーかクリーム色のワンピースにレモン色のカーディガン。
ひじまであるゆるいふわふわな黒髪をツーサイドアップに。
ややかたくるしい敬語もどきを話す。

盲目でふだんは目を閉じている。（光は感じるが小さすぎると見えない）
目の色は黒。お手伝いさんで後方支援。

秋月愁（あきづきしゅう）　本名　霧咲竜美（キリサキタツミ）　男　１８歳
茶色の重力を無視したかのような外ハネのショート。
青灰色で切れ長の瞳に右目の下にうっすらと傷跡がある。
すつきりとした顔立ちのイケメンでモデルにとスカウトされるが、
目つきが悪いため不良と間違われる。
ジーンズに青いパーカーに紺色のジャケットとラフな格好がおおい。
気さくで人望も厚く人気者。我が道を行くタイプでもあるが。
偽名で大学に通っている。

ミシェル・マールブランシェ　本名　有川朔夜（アリカワサクヤ）　女　１４歳
明るい栗色のロングヘアをポニーテールを左にずらした髪型でまとめている。
明るいパステルカラーの服も多いが黒い服も多い。
明るい栗色の瞳や可愛い顔はアイドルのよう。
明る優しいので人気者。
飛び級で大学生をしている。

ノエル・マールブランシェ　本名　有川黒夜（アリカワクロヤ）　男　１４際
黒くまっすぐなショートに黒いシンプルな服。
感情表現や発言が極端に少ない。
表立って行動するより隠密行動が得意。
ミシェルと同じように血のつながりはない。
ミシェルと二卵性の双子で通している。
有川姓だが、アリサとは血のつながりはない。
飛び級で大学生をしている。

人物紹介（後書き）

辛口批評は遠慮ください。感想等を受け付けております。言葉のオブラートに包んでください。

この物語は「終わりなき歴史と繰り返される過ち」の続編です。（前書き）

ちなみに、タイトル、サブタイトルに意味はありません。

この物語は「終わりなき歴史と繰り返される過ち」の続編です。

首都に近い郊外の街に多くの土地を持つ大きな神社が一つ。

その神社の敷地内の山の一つにその場所はあった。

地元も人なら誰もが知っているよろずや「煌星（きらぼし）」が。

事務所までは細い舗装されていない獣道同然の道を中腹まで登った所にある。

そこまでは、依頼人が登ることをゆるされる。

それ以上は社員の社宅でプラベートスペースのため、

経営者の親族であろうと理由なしに訪れることは禁忌とされる。

さらには防犯目的で５０レベル以上のポケモンが放し飼いなので不法侵入者はまずこない。

特殊な規則があり、仕事中は本名を呼ばず偽名で通すことなどがある。

そんなよろずやに足を踏み入れたものが一人。

これから物語が幕をあける。

さて、楽しいお遊戯（ゲーム）を始めましょう。

ある寒さの厳しい冬の午前

重厚なつくりの建物の前で金髪ロングの少女が大きな扉の前でたたずんでいた。

少女は何事かを思案しては扉に手をかけ開けるかで躊躇していた、

そして、幾度目かの思案の後開けようとする。

「・・・・・・・開いてないけど」

「きゃああっ！」

おどろき、へたりこみ背後を窺う。

そこには高校生くらいの紺色のセーラー服の女子が不機嫌そうにたっていた。

サングラスで目つきは不明だが、かなり機嫌は悪そうだった。

ポケットからカギを出し無言で開けて数瞬みてはいっていった。

あわてて外よりもいくらか暖かい中に入った。

フローリングの部屋に通されて、臙脂色のソファーをすすめられた。

「この紙に名前、住所、用件をどうぞ」

筆記中にいつのまにかこつ然と姿を消したが、視線を下に降ろすとブラッキーがおおあくびをした。

しばらくすると紅茶と緑茶を盆に乗せて戻ってきた。

「済みましたか？」

「あ、はい・・・・・・どなたですか？」

「失礼しました。私はここ、よろずや「煌星」店長川村アリサです」

「えっ・・・・・そうなのですか？」

無言で記入された紙を読んで、

「・・・・・用件はまだいちども逢ったことのない母と逢いたいと？」

「はい」

「わかりました。今日は従業員と話し合いますので、明日また此の時間帯におこしください」

そして静かに見送った。

こうした依頼がまだはじまりにすぎないことを誰が予想できただろうか。

夜七時　よろずや煌星、業務棟（事務所）

「・・・・・・以上、説明終了」

上座でずりおちたサングラスを中指で直して淡々と説明を終わらせたアリサ。

腕を組み、足を組み直す。

「はーい！質問！お姉ちゃんはどうして引き受けようとしたの？」

栗色の右寄りにポニーテールの娘が可愛らしく挙手発言。

「たまには動かないとなまるからよ。あと、子供っぽい」

「・・・・・姉さん、見当ついているの？」

「なんとかなるでしょ」

「おいおい。アリサ、おまえらしくねぇなぁ」

黒衣の少年が的確に端的に質問。

いきあたりばったりの解答をらしくないと言う、
ふてぶてしい笑顔とともにどっかと彼女の隣にすわる濃い栗毛の青年。
「あー！お姉ちゃん！いま北のフィオッカの国の樹氷が見頃だって！」
「フィオッカの樹氷はいいぞ。高原の中の丘が一番キレイだって話しだぞ」
「じゃあ、そこに行きましょう」
「やったー！旅行だー！大学休みでよかった！」
「そうと決まれば、したくするわよ」
こうして夜はふけていった。

この物語は「終わりなき歴史と繰り返される過ち」の続編です。（後書き）

注釈

フィオッカ・・・・・イタリア語で雪の意。

寒いのは嫌いです

昨日と同時刻

夜のうちに降り積もった雪でくるぶしまでうまった。

「厚手のコートがあってよかった」

「たしかに。で、アリサ依頼人はまだか？」

「もうすぐじゃない？愁がせかすからこんなことになったのじゃないの。

私はまだ暖房のきいた部屋にいたかったのに」

「姉さん、もうきた」

「ありがとノエル。ミシェル！遊んでいると置いてくわよ」

「待ってぇ～」

赤いコートに白いマフラー、

茶色のブーツと重ね着した今回の依頼人ミューラが雪と細い道に悪戦苦闘の末息をきらせて来た。

アリサは簡単に説明して汽車に飛び乗った。

列車に揺られ、乗り継ぎ、フィオッカの首都スノードロップについた。

「お姉ちゃん、やっとついたね。片道二日の苦労が報われるといいな」

「そうね。ミシェル、まずは宿を取りましょう」

「おい！大変なことになっているぞ」

「何よ愁、おおげさな・・・・・・」

そこにはミューラの姿はどこにもなかった。

「まずは荷物を預けてから会議よ」

首都の中心よりやや外のサービスも質も並みのありふれた宿をとり、緊急会議が始った。

大通りを駆け、四つ辻に至った時に

「私は北を、ミシェルは西を、ノエルは東を、愁は南に。何もなくても六時に此処で」

「おう！行くぜ絹恵（きぬえ）」

色違い特有のエフェクトとともに金色のチルタリスが空を舞う。
そのまま彼らは南に。
「・・・・了解。いくよオーレリア」
手袋、マフラー、コート全てを黒で統一した少年、
ノエルが傷ついたゴージャスボールを雑作もなく投げる。
赤いスカーフのルカリオがでてきて波動で探る。
「わかった。いくよムム」
傷だらけのモンスターボールから他の個体よりも小さいムウマが
くるくると回転して笑いながらついていく。
「ヤタガラスは上空から、ミコトは私と一緒に」
他の個体よりも二周りも大きいドンカラスが威圧感たっぷりに鳴く。
しなやかに動くブラッキーが主をみつめてから走る。
それぞれに進む。
嗚呼、またやってきてしまう。
闇をもたらすものが。

「・・・・・異常なし。何かあるか？絹恵」

飛び回ってはみるものの、見つけられずに首を横に振る。

「そうか、もういいぞ。戻ってくれ」

細かい傷つや消しのための加工と同等の効果を生み出し、鈍く光るモンスターボール。

それをベルトホルダーにセットする。

他はハイパーボールなのにひとつだけのモンスターボールは違和感がある。

「しかたない、上空から探すか。・・・・・・誰だ！」

曲がり角、闇をまといたたずむ者が一人。

「驚かせてしまいましたか。・・・・・・おっと失礼私はマルコシアスと申します。

まぁ、通り名ですがね」

シルクハットをかぶり、漆黒のマントとスーツに身を包む二十代前半の若い男。

「オレは秋月愁だ。ちょっと人探しをしていてな。通してくれないか？」

「そうはいきません。こっちも仕事ですから。・・・・・・

あと、嘘はいけませんよ。ペンドラゴン陛下」

「身元が割れてやがる・・・・・しょうがねぇ。ガイア、かえんほうしゃ！

メシアはハイドロポンプ！」

つぶらな瞳のカイリューが急に殺気立ちはばたく。

血気盛んなボーマンダがほえる。

ガイアと呼ばれたカイリューは深く息を吸い込み炎をはきだす。

メシアと呼ばれたボーマンダは上空から距離を取りハイドロポンプをくりだす。

「淡雪、ふぶき。常闇（とこやみ）、あくのはどう」

純白のグレイシアが軽く新雪に着地する。

ブラッキーが派手に攻撃を仕掛ける。

戦うしか道はなかったのだろうか

薄暗く湿った路地。

寒さに凍え身を寄せ合う孤児、孤児達にすり寄り暖をとろうとする薄汚れたポケモン。

昔、かつて自分がそうであったことを思い出す。

日は翳り、宵闇を誘う。

「ヨノン、ムム、探そう

さらにダークボールから巨躯のヨノワールをだす。

ムウマが音も無く飛び、見回すがみつからない。

「みつからない・・・・・他を探そう」

ヨノワールが主人ミシェルのオレンジのコートのすそをひっぱる。

「どうしたの？」

ひっぱるのをやめて路地を少し進む。

「待ってよ～」

曲がり角のほの暗い闇のそこから白い何かを抱えて戻ってきた。
「何だろ？・・・・・これってイーブイ？」
無言でうなずいてから主人にあずける。
「わぁー真っ白。もしかして色違いじゃなくてアルビノかも。かなり弱っているから、
ポケモンセンターに急ごう」
ヨノワールだけを戻して引き返した。

迷路に近い灰色の路地を抜ける。
「・・・・・ハズレ、か」
――――どうやらそのようですね。
いまだ幼さ残る可愛らしい女の子の声がした。その声は肉声ではなく頭に直接響く声、
いわゆるテレパシーの一種だ。
波動の応用で血のにじむような努力の賜物で才能も必要とする。
「迷ったってことはないよね、オーレリア」

――――大丈夫です。これ以上の探索は無用です、戻りましょう。

雪がちらつき、冬の使者が存在していることを誇示する。

寒さで肩を振るわせた相棒に自身の漆黒のマフラーをかける。

「かぜをひいたら悪いから戻ろうか」

――――はい。

主のささやかな気遣いに体以上に心が温かくなるオーレリアだった。

奔る。

追われていることに気がつかなかった自分の落ち度を恥じながら。

抗う。

待ってくれている人、仲間と呼べる人の許に帰る為に。

足掻く。

己の信じる道に至る為に。

「こうなったら奥の手・・・・・使いたくはなかった」
建物を盾にしてコートをいじり、隠しポケットからシグ・ザウエルＰ２２５をとりだす。
弾を装填しているか確認後安全装置をすぐに外す。
一分以内に終わらせて二匹に合図を送る。
（強行突破しかない！・・・・・すぐに終わらせる、終わらせてみせる）
「ミコト、ヤタガラスあくのはどう！」
アリサを追う人物は黒いマントを身に着け姿は杳として知れない。
威嚇射撃として足許、体スレスレに右と左に撃つ。
「ちっ、アレン、ブラッキーにメガホーン！」
先方は投げ捨てるようにボールを放った。
「ミコト、みきりでかわしてヤタガラスにてだすけ。ヤタガラスはブレイブバード」
闇を切り裂くようにアブソルが角を振り上げる。
それをうまくみきってアブソルの懐に潜り込み、すりぬけ、もどりてだすけで助力。

狙いを過たずに一撃でしとめる。
マントを脱ぎ捨て手許でキラリと光るものがなにか理解すると距離をとる。
倒れたアブソルを戻し、アリサをつかみにかかる。
「・・・・目的は何？」
氷のごとき冷たさを持つ理性で問いかける。
「邪魔なのよ。アタシたちの計画の遂行にね」
バラをあしらった黒いドレスハットに黒を基調とした白のレースがアクセントとなった
ゴスロリのドレスの黒髪ツインテールの少女が吐き捨てる。
ツインテールの少女の顔右半分には黒いベールがかかっており瞳の色が見えない。
「アタシはアガレス。アンタらの客は預かった。これは宣戦布告と挑戦状よ、
場所は西南の工業地帯の廃工場。
せいぜいがんばって探しなさい。アハハハ！フーディン、テレポート」
「組織、か・・・・やっかいなことに」

コートを翻し、ヤタガラスで帰った。

これもまたひとつの終焉。

某ホテルの一室

「・・・・・ということかがあった」

かいつまんで事情を互いに報告して作戦会議。

「私はね、イーブイを保護してポケモンセンターで看てもらっているの」

「・・・・とくになかった」

「オレはだな・・・・・バレた」

「私はさっき話した通り、依頼人の居場所の判明と敵との遭遇。それだけ」

「それにしてもさぁ～・・・・・やっかいなことになったよね～」

「でも、結論はだなぁ・・・」

「・・・売られた喧嘩は」

「買う！・・・でしょ？」

「そうだろうと思った。・・・・・やってやろうじゃないの」

明日、戦場を駆けることを予想して英気を養った。

早朝五時　ホテルの一室。

「作戦通りに。作戦開始」

「らじゃー！」

「・・・・はい」

「おう！」

動きやすいかつ、目立たない黒装束。各所に武器、

銃器を隠し持つ。万が一の場合に備え自分でも戦えるように。

ポケモンを出すと目立つためださず徒歩で数分の工業地帯に到達。

稼働していない工場は目立つ、手分けして潜入した。

「とちら、アリサ。ビンゴ。発見したわ・・・・どうぞ」

「こちら愁。・・・・まったくどうして無線なんだ？向かう。どうぞ」

「こちら、ノエル・・・・・向かう。どうぞ」

「こちら、ミシェル。どうして無線なのだろ？向かいます。どうぞ」

無線をきって、弾を装填、安全装置の解除。
「3、2、1・・・・・・0！」
そして不意打ちのカタチで突撃した。

制圧はあっけなく終わった。
わずかながらかすり傷程度の負傷はあったが。
縄を解き、猿轡と簀巻き状態から解放されると泣き出してしまった。
「恐かったよぉ～」
「はいはい。泣かないの」
「なんかお姉ちゃん、母親みたいだね」
「・・・・・母親か。憶えてないなオレは。どんな顔だったかも性格も。
オヤジはべた惚れだったようだがな」
「考えたこと無い。本当の親のこと」
「あたしも～でもみんながいるからいいもん」

「たしかにな」

「そうかも」

落ち着いてから事情聴取。

ポケモンショップに気を取られて一瞬のうちにここに連れてこられたとのこと。

「それにしても、組織がらみとなると・・・・・これからいろいろ強化する必要がありそう」

「強化って？」

「よろずやと本家の警備に強化訓練とか」

「あれヤダ。おもしろくないしぃ～」

「オレはいいぜ」

「・・・・・異論はない」

「そんなぁ～」

「ぼんやりしていると置いてくぞ！」

「待ってよ。みんなぁ～」

そして双方駒を進めた。

フィオッカの国の外れの平原に足を運んだ。
まばらに生える樹木に氷がはりつきクリスタルのような煌めきを放つ。
小高い丘にかすかに赤い屋根の小屋が見えた。
「ほえ～。きれいだねムム」
彼女のムウマが賛同するように啼く。
まだずいぶんと距離があり、雪が歩みを遅々として進ませない。
「飛ぶか？」
「しょうがないわね・・・・・ヤタガラス、あの小屋の近くまで運んで」
「アタシ飛行タイプ持ってないよ」
「・・・・天音、小屋まで飛んで」
フレンドボールから飛び出したトゲキッスが嬉しそうにすりよる。
甘えてきたトゲキッスをなでる。
「ミューラ、メシアに乗れ。ミシェルはガイアに」

「はい」

「やった。ありがと愁」

「準備はいい？行くよ」

約束された終焉にはほど遠いが、終わりに似て非なる区切りは約束された。

感動の再開シーンとまではいかないが、

それをのんびりよかったと祝福するミシェルと内心つまらないが、

無表情でセリフ棒読みで祝福するアリサ、愁、ノエルだった。

ミューラは働いて細々とここで暮らすと言った。

彼女の母も心労などで、すこし疲れた顔はしているものの元気だった。

暗雲が立ちこめ、それを理由に帰った。

帰る前に、くだんのイーブイを預けたポケモンセンターに立ち寄った。

ミシェルはすっかりよくなったイーブイと戯れ、アリサはイーブイのケガの状況を聞いた。

「イーブイかわいいねお姉ちゃん」

「ミコトがいるじゃない」

「えー、かわいくないよミコトは」

しばらく遊んでからジョーイさんと何やら話し込んでいた。

「イーブイをひきとることになりました！」

「このまま野生に返すよりも安全なので。それにすっかりなついてしまいましたし」

にこやかに話すジョーイさん。

「名前はイヴェール。イヴェールで決まり」

「いいんじゃないか？」

さっそくゴージャスボールに入れる。

「それではお世話になりました」

荷物を手早くまとめて汽車に揺られた。

ポケモン座談会

久方ぶりに我が家に戻ってきた一行。

これはその幕間の物語のカケラである。

「ポケモン定例集会はじめるよ」

やや低いアルトが板張りの道場に響く。

臙脂色の座布団を数枚重ねた上に座るアリサのブラッキー、ミコトが声高に宣言する。

「今夜は新入りの紹介と挨拶。後は近況報告。以上！」

「はじめまして、イヴェールです」

ミコトの後ろから純白のイーブイがでてくる。

それからは十分ほど和気藹々と自己紹介と雑談。

一喝で整然と並ぶ。

「今は何もなくとも警戒態勢を厳重にすること。いよいよおかしくなりはじめたね」

会議はすぐに終わった。

三々五々帰りだすときにヤタガラスがこっそりイヴェールに耳打ち。

「ミコト姐さんに逆らわないほうがいいぜ」

イヴェールはその意味が理解できなかった。

迎撃せよ。

「なるほど。わかりました」

いつも通りに紺色のセーラー服のアリサが淡々と事務的に用紙に記入する。

「私のアリアドス♀のアリスちゃんがいなくなっちゃったの」

今回の依頼人が時計のついた水色のリストバンドで涙を拭い思いを語る。

嗚咽にあわせて茶色のツインテールが揺れる。

「大丈夫？ミュースさん。お茶飲んでおちついて」

フリルがたっぷりの白いワンピースのミシェルがそっと気遣う。

ムムが慰めようとして近づく。

「ありがとうございます。これでやっと・・・

いなくなった時間は二日ほど前・・・二日前の夕刻にいなくなりました。

場所は首都特別地域連邦成立記念公園です」

「わかりました。ご同行願います」

「わかりました」

また、ひとつのはじまりが紡がれた。

緑の芝生、チョコレート色のレンガの道、

中央部には底に鮮やかなガラスをしきつめた白い大理石の噴水。

御影石の記念碑が存在を誇示する。

面積は学校が二つ半ほど入ってしまうほど大きい。

端には手付かずの森が存在しポケモンたちの楽園となっている。

よろずやの場所から汽車で二つほど駅を通り過ぎた首都の中心部に位置する正式名称、

首都特別地域連邦政府成立記念公園。

周辺住民には首都公園の名前で親しまれている。

平和そうにくつろぐ人々を尻目にいつもの服装、いつものメンバープラス依頼人の形で行く。

「日課で毎朝と夕方に散歩に行くんです。てもちのみんなをだして休憩しているときに

いなくなりました」

ミュースは地図のある地点を指し示し、辺りを見回す。
そこは未開の森が見える公園のはずれ。
「なるほど。ミシェルとミュースさんと愁は森付近を、私とノエルは森に行きます」
「アリサ、行くな。もう傷つくところをみたくない」
愁が断固とした口調でひきとめようとする。
「大丈夫。あの頃よりは強くなったから」
苦し紛れに悲しそうに微笑み、それからアリサは軽やかに森へ駆ける。
「願わくは、愛する人が傷つかぬように、愛する人を守れるように」
雲ひとつない空に引き止められなかった彼は願う。
儚い願いは虚空へと消えた。

依頼人メモ（前書き）

なにかあれば追加します。
１２月８日に親戚の「暁ノ星」氏からコラボ依頼アリ。

依頼人メモ

しろうささん　投稿

依頼主の名前「ミューラ」

依頼主の性別「♀」

依頼主の性格と容姿「金髪ロングで紅いバンダナを首に巻いており、服は、蒼いロングワンピース。
胸元に白いリボンが付いてます。性格　マイペースです。」

依頼内容「お母さんに合わせて！！生前に一度も会ったことがない母に逢いたいんです！！」

ハクさん　投稿

依頼と依頼主応募用紙〜

依頼主の名前「ミュース」

依頼主の性別「♀」

依頼主の性格と容姿（細かく）性格「いつも自分のポケモンに気遣っていて、みんなから篤い信頼を得ている」
容姿「水玉1（水色）のスカートをはいていて、ピンクと白のボーダーのベストを着ている。
腕に水色のリストバンド1（時計付

き）をつけている。

髪は、茶髪にツインテール。」

依頼内容「自分のポケモンが迷子になったので、助けてほしい」

Ｔａｋａさん　投稿

依頼主の名前

アスト

依頼主の性別

男

依頼人の年齢

２２歳

依頼主の性格と容姿１（細かく）

黒のムートンコートに、ダークブラウンのカーゴパンツ。ベルトには、護身用のレイピアを装備。

ゆるいパーマのかかった黒髪を、背中まで伸ばしている。瞳は琥珀色で、やや幼げな顔付き。

腕が立つトレジャーハンターだが、普段からギリギリの生活を強いられている。それは、路地裏で暮らしている子供達を養っているためだとか。

普段から貧しい生活をしているものの、底抜けに明るい性格で常に前向き。

依頼人のてもち（あれば）

ムウマージ♀

依頼人の口調、一人称、二人称、セリフサンプル
「俺を盗賊なんかと一緒にしないでくれ！」
依頼内容
良いお宝の情報を聞いたが、どうも今回の場所は自分一人では厳しい。
宝の半分は譲るので、手伝ってほしい。

暁ノ星からのコラボ依頼。というより、氏名等を微妙に変えての本人出演。
氏名　金倉（かねくら）　有（ゆう）　注、普段表示はユウ。
年齢　１６　性別　男
性格　オタク気質などれをとっても普通な少年。
注、ぶっちゃけて言うと、作者は暁ノ星氏の性格を把握できていない。
年齢＝親戚である年数なのに。
とにかく、いろいろありすぎてよくわからないやつ。とだけ言いたい。
依頼内容　ジムトレーナーをしているジムのリーダーが脱走したため、
ジムリーダーの捕縛。
書置きには「ミーはソルジャーなのデス」という書置きがあったらしい。
リーダーの尻拭いで怒り心頭。
てもち　ピカチュウ♂那由他（なゆた）
電気タイプのジムだからという理由で所持。
役目はマスコットキャラクター兼すさんだ精神の癒し担当。
ガブリアス♀　彼方（かなた）

主にリーダーのおしおきに使用される。
最近はほかのジムトレーナーに対して無双する時に出てくる。

宝石の輝き（前書き）

やや一人称視点。

宝石の輝き

よろずやに近いところに二つの鏡写しの医院がある。
右は立花医院、左はタチバナ医院。
小児内科とポケモン内科である。
双子の姉妹が経営していることで有名。
実は奇妙なうわさがある。
時々入れ替わっているらしいと。
それは後方支援担当のよろずやメンバーの話。

早朝、囀りが聞こえ始める頃。

二つの医院の裏手、鏡写しの赤い屋根の二階建ての住宅が二つ。

正確には、二つで一つ。二つの家がくっついている。

その家の小児内科の裏手の家。

二階の一室、十代後半のゆるいウエーブのセミロングの少女が目を覚ます。

ベッドのそばの金色のグラエナが毛布に包まって寝ていたが、

音もなく立ち上がり、ドアについている紐をひっぱりドアを開けて階下に降りる。

そこにはまだ、喧騒と程遠い静寂に包まれていた。

シンプルな木目の美しい木のテーブルに朝食が並べられていく。

「おはよう。プルー」

肩にやや赤みの強い体色のエネコをのせたふわふわしたショートの栗色の三十台半ばの女性が、

プルーと呼ばれたグラエナに挨拶する。

エネコは肩から降りて挨拶する。

「もうごはんができたから呼んできてね」

二匹は意気揚々と階段を上っていった。

「さてと、いまのうちに着替えよう」

ダイニングのハンガーポールの白衣を手に取り身にまとう。

そして、朝は静寂から喧騒へと支配者を変える。

ダイニングの隅にさりげなく設置されている柿渋色の扉。
それは二つの家を繋ぐもの。なくてはならないもの。
その扉を片方の家の主が遠慮なく開ける。
「ユズ、寝坊してないよね？」
確認の意味をこめてか、向こう側に呼びかける。
ひょっこりと瓜二つの女性が顔を出す。
「大丈夫。ミカンは心配性だね」
まったく同じ服装で声もまったく同じ。
そう、一卵性の双子なのだ。
「今日は入れ替わる？」
「いや、やめとく」
「じゃ、またね」
「うん」
短い会話が途切れると扉は閉められた。

やや忙しい土曜の午前中が過ぎ、ささやかなひるやすみを過ごす。
小児内科の方の立花医院の宿直室でくつろぐ、ただ一人の医師にして主の
立花ミカンが飲みかけのコーヒーを手にぼんやり考え込む。
かわいくて自慢の玉奈（たまな）、
娘は目は見えないけどパートナーのポケモンがいるし、
やんちゃでいろんなところを走り回る息子の宏樹（ひろき）も
いまは遊びに出かけて静かだ。
宏樹は先月１０歳になり、
わたしが知り合いで級友にして悪友のポケモン博士風宮（かざみや）
女史に頼み込んで温和で人なつこく素質のあるポケモンをと、
無理難題を押しつけてしまったが見事になしとげる彼女に感服した。
あの子のゴマゾウのダイチはよきパートナーだ。
私のパートナー、エネコのすだちにユズのパートナーでエネコのライムもそうである。
時計を見るとあと数分で昼休みが終わる所だった。

彼女は立ち上がり、診療室へと入った。

朝と夜は廻る

診療室から体温計等を手に白い階段を上る。

医院の二階部分、医師の仮眠室ともう一つ部屋がある。

それはこの建物に一つしか無い病室。

象牙色の引き戸をスライドさせて患者の朝の検診をするために足を踏み入れる。

「おはよう。調子はどう？千影（ちかげ）ちゃん」

「おはようございます。ミカン先生」

色白で影と幸薄そうな１０歳ほどの少女のか細い消え入りそうな声が虚空に吸い込まれる。

「骨にひびが入っているくらいだから明後日には退院できるよ」

「そうですか・・・・・・」

「あと、お誕生日おめでとう。これ、プレゼント」

そう言ってポケットからとりだしたのは一つのモンスターボール。

その中からポケモンをだす。

中から出てきたのはつぶらな瞳のピカチュウだった。

「かわいい・・・・・・・でも、いいの？それにお父さんやお母さんが・・・・・」

うつむいて暗い表情をする。

「大丈夫、昨日許可もらったし、この子は女の子なんだよ」

「・・・触っても良いかな」

遠慮がちに顔色をうかがう。

「もちろん」

ひざの上に座らせる。そーっと手を伸ばし、触れようとする。

ピカチュウのほうから率先して手に触れる。

一瞬おどろくがすぐにうちとけた。

そのピカチュウに輪廻（りんね）と名付け青いリボンをつけて

双方が笑顔になっているのを

見届けると部屋を去った。

午後から千影(ちかげ)に面会があった。
面会者は千影の妹の光(ひかり)。
のんびりと日常の瑣末事をおもしろおかしく話して笑い合っていた。
おとなしく、ひかえめな姉とは対照的に明るく元気いっぱいだ。
双子ではないが、よく似ていた。
彼女らは双子ではないが、誕生日の関係で同じ学年だと聞いた。
妹の頭には陽気でイタズラ好きなパチリスが光と一緒に笑っていた。
姉の方はひかえめにちょっぴり笑った。
彼女の相棒も同じように笑った。
斜陽が部屋を包む頃に光は帰っていった。

人気の無い医院で院内の白を黄昏が染め上げる。
外来患者がいなくなり、一息つくミカン。
水からが入れたコーヒーの水面をみつめて感慨に耽る。

愛娘の玉奈(たまな)が数日前に保護したエーフィの♀について。
かすり傷程度で内傷などはなかった。
他に特筆すべきことはかなり汚れていたことだけだった。
おおっぴらにはできない方法調べてみると、
トレーナーのポケモンということがわかった。
だが、調べられるのはこれくらいで、
これ以上は法に抵触するので調べられなかった。
今は気位の高い彼女の世話に追われているであろう我が子を心配しつつ、
仕事に戻ろうとぬるくなったコーヒーを飲み干し立ち上がる。

とあるポケモン視点

今、アタシは逢魔ヶ時の薄暗い路地を全力疾走している。
それはすこし時間をさかのぼる。

玉菜(たまな)に毛づくろいをしてもらった後の道具をかた付けるちょっとした時間に

いたずらをしたうえに悪口を言ったことから玉奈のポケモンのサーナイトの

エトワールとグラエナのプルー

（どちらも色違いで♀）

の逆鱗にふれ、集団リンチにあいそうなので家を飛び出した。

♂は美女軍団（？）に追いかけられれば本望だと思うだろうが、

あんな鬼の形相で追いかけられて、

攻撃されるあたしはたまったもんじゃない。

あの目には殺気がこもっていた。

つかまると確実に殺されることはわかっているので全力疾走中ってわけ。

ふと気がつくと袋小路に追い込まれていた。

エトワールがシャドーボールで牽制し、

誘導しているうちにプルーは遠吠えやそこらへんの野生ポケモンに何やら指示をだす。

主にイトマル、アリアドスなど。（ここ重要、テストに出ます）

自暴自棄になり、応戦してみるも黒い笑顔でかわされる。

背後や頭上でかさかさうごめく音が消えると四方八方にクモの巣が張り巡らされていた。

気づいたころにはもう遅かった。

「謀ったわね！」

エトワールがすばらしい笑顔1（目が笑ってない）で悪役よろしく叫ぶ。

「ふふふふっ。甘い、甘いわ！わたくしたちから逃れられると思って？

たっぷりとかわいがってあげてよ！」

どこの昭和の悪役だろうか。

逃げ場もなく、追い詰められて、

死んだほうがましだと思える拷問をエーフィはたっぷり受けた。

くるり、くるり。また廻（めぐ）る

「ビンゴ、ね」

森の奥深く不自然な人工芝と偽装され、

岩のように見せかけた発泡スチロールの塊をとると、

人が楽に一人はいれるくらいの黒滔々（こくとうとう）たる闇があった。

金属製のハシゴまでついてあり、そのままノエルとアリサは穴へ入った。

音もなく底へ着地すると持参してきた暗視スコープを装着し念のため、

銃の安全装置は外さず手に持ちながら怪しげな機器類が作動する、

研究所らしき地下施設の奥を進んでいく。

安っぽいリノリウムの通路の先に所長室のプレートのかかった部屋の扉をアリサが開ける。

開くと、色さまざまなランプが点滅する機械だらけの部屋だった。

部屋の中央には、痩せぎすな中年男性と大きなピンクのリボンをつけたアリアドスがいた。

そして、つながる。（前書き）

ほんとうにひさしぶりです。ごめんなさい。しばらく放置してました。

そして、つながる。

「もう、お帰り。送るから」

銀縁のメガネの神経質そうな白衣の男が消え入りそうな小さな声でつぶやいて、

ピンクのリボンをつけたアリアドスを送り出そうとする。

アリサはさっと銃を隠して、歩き出したアリアドスの邪魔にならない位置まで移動する。

それでも、男への警戒はやめない。

「すいませんねぇ。あの子が迷い込んでしまって、寂しいから話し相手をしてもらいました。

おっと、自己紹介が遅れてしまいました。私はダンタリオン。とある組織の研究員です。ここは、

単なる資材、廃材置き場。ちなみにあのこには何もしていませんよ。

それにもうすぐここも引き払う予定です」

そういうと、研究員のダンタリオンはさらに奥の扉へと進んだ。

残された二人は、念のために今いる部屋のほかの部屋も見て回ることにした。

そして、つながる。（後書き）

まずい、組織の目的考えてない。それに、ダンタリオンといえば某ライトのベルのキャラしか思い浮かびません。関係ないですけど。

（探耽求究ぐらいしか・・・）

それでは、また次回。

鎖と掟と血と（前書き）

テストがあるので、しばらく更新はお休みです。

鎖と掟と血と

地下の研究施設もとい、資材廃材置き場の更に地下に新たな発見があった。

施設の一番の奥には実験使われたポケモンたちが檻の中に閉じ込められていた。

檻につけられているシリアルナンバーと所長室に無造作に置かれていた資料の束と照合する。

全体の3割は、闇取引と他地方から捕獲された野性のものと判明。

残りは施設内で繁殖飼育された個体だった。

潜入したアリサとノエルはポケモンたちを収容できるボールにすべておさめて

すべてをよろずやが引き取ることにした。

本来のあるべき姿や自然の理から外れたものたちを野放しにするとよくないと判断したからである。

そして、よろずやへと戻ろうと光ある場所へと帰還する。

また、いずれ・・・

１０分ほどで、当初の待ち合わせ場所まで移動し、
事情を地上に残った3人に話してよろずやに戻った。
依頼人のミュースに事情をかいつまみ組織に関するところは省き、
ただ、天然の地下洞窟に
迷い込み出られなくなっていたと話した。
ミュースはいぶかしみながらも、行方不明となっていたパートナーとの再会を喜んだ。
依頼料などの交渉などですべてが終わった頃には夜もすっかり更けていた。
実験動物となっていたポケモンたちは翌日整理などをすることにして、床に就いた。

翌日、ポケモンたちに固体識別のために名前をつけて育て始めた。
自身のてもちを含めたすべてのポケモンを名簿兼データブックにまとめると昼を過ぎていた。
ふと、資料整理をしていたアリサはよろずやへと向かってくる聞き覚えのない足音に気がつき

資料庫の倉庫からでた。

滅入り苦しみます。来年のクリスマス中止のお知らせ（前書き）

リア充なんか消滅すればいいのに。更新遅れてすみません。

滅入り苦しみます。来年のクリスマス中止のお知らせ

よろずや煌星(きらぼし)に依頼をしてきたのは、黒のムートンコートに、
ダークブラウンのカーゴパンツを身に着けたベルトには、護身用の
レイピアを装備していて、
ゆるいパーマのかかった黒髪を、背中まで伸ばしている。瞳は琥珀色で、
やや幼げな顔付きの十代後半から二十代はじめに見える男だった。
アリサが淡々と事務的に依頼人情報や連絡先を記入する。
室内の気温が屋外と変わらない応接室に
かすかに大きな柱時計の針の音だけが寒々しい空気に響く。
よろずやの建物にはアリサと依頼人の男だけで、ほかのメンバーは
不在だった。
「・・・・アストさん、２２歳、依頼内容は山脈中腹、
時空の神殿の財宝。でよろしいでしょうか」
アリサが端的で事務的に読み上げる。
「ああ、そうだ」

「わかりました。今はメンバーがいないので翌日の今頃でよろしいですか」

「かまわない」

依頼人のアストが出て行くのを見送ってから、アリサはそっと尾行を開始した。

滅入り苦しみます。来年のクリスマス中止のお知らせ（後書き）

よいお年を。・・・・リア充撲滅キャンペーンのお知らせでした。

それでは

時は黙して語らず、勝者の嘘に彩られて歴史は綴られる。

足音を消して、気配を消して、息を殺して、薄暗くあまりキレイではない

裏路地や小路を進む。依頼人のことが樹になり、真偽を確かめたくて尾行する。

古ぼけた灰色の石畳の道の先に広場と大きな建物があった。

所々はげてしまったペンキ塗りの建物のそばに「星空こども園（ほしぞらこどもえん）」

とベニヤ板にかかれた看板がひっそりとたっていた。

どうやら児童施設のようらしい。このような路地裏のような寂しい場所にあるということは、

個人が勝手にひっそりと始めたらしいことが見て取れる。

中を覗くと建物の中で今回の依頼人が孤児であろう子供たちにパンを配っていた。

アリサは依頼人を物陰からひっそりと観察していたが、

日がすっかり暮れる直前に裏路地の闇の中に消えていった。

その一部始終を施設の周りの建物で羽を休めていた鳥ポケモンだけが知っていた。

戦略会議

いつものよろずやメンバーが全員そろったのは九時を過ぎてからだった。

ソファーのメンバーにとっては定位置である席についていることを確認するとアリサは

話を切り出した。

「・・・・・という依頼なんだけど、どうする？」

ソファーで部屋の一番はしにある場所からココアをのんびりと飲んでいるミシェルは飲み終えて

しばらく考え込んでから自分の答えを口にした。

「依頼人が示してたって場所、昔行った時空の遺跡のまだマッピングのすんでないところでしょ？

落盤さえなければ行ってもよさそうだね」

紅茶の水面をみつめていたノエルが身に着けていた黒いマフラーをしっかりと位置を直すと

「・・・・行ってみる価値はありそうだね」

ぽつりと一言だけ述べた。

少しの間議論を重ね、もって行くものの準備や必要なものを禁則事項なルートでそろえた。

潜入いたします。

「警備がゆるい」

不毛な土地を登りながらアリサたち一行は依頼人も連れてそれぞれに感想を述べた。

荒れた山肌のめだつ荒涼としたヴァンダイム竜帝国(りゅうていこく)。

平地は比較的に肥沃なのだが赤茶けた山肌の露出する荒れた山脈を持つ不思議な帝国の所有する

シンオウ地方の伝説のポケモン、ディアルガ、パルキアとの関係の深い神殿だった遺跡。

その遺跡の落盤が多く、

公式の調査団や盗掘者もいまだ踏み込んではいない最奥域に踏み込むことにした。

中に入るとひんやりと冷たいしめった空気が風に流されずにとどまっていた。

動かない空気と薄暗く、陰惨な雰囲気が時が止まっているかのように錯覚させた。

意を決して立ち入り禁止とされている区域の奥に入った。

詩人の歌う歌の名は・・・

細長く、湿った空気のあるくらい地下道を携帯してきたランタンのたよりない灯火

だけで進んでいく。

進んでいくと、地下道の終わりがかすかに見えるようになったころに地下道に変化が現れた。

かすかに水の音が聞こえ始めたのだ。

近づくことでさらにどのような水音なのかが判明した。

「この音ってもしかして・・・・滝、かな？」

地下道の三分の二ほど進んだところで足を止めて少し考え込んでからミシェルが相棒のムウマの

ムムと顔を合わせてから最前の露払いとして歩く無言のアリサに問いかける。

「さぁて、ね」

振り向かずにぽつりと独り言のようにつぶやくと地下道の終わりで足を止めた。

うつろう事実に瞳はいくつのことをとどめていられるだろうか

長い地下道を抜けるとそこには大きなホールのような洞窟と滝があった。

天井は高く、証明が不必要なほど明るいことから上は地上に通じていることがわかった。

ひとが三人ほど並べばいっぱいになるような通路ほどの面積しかなく特筆すべきものは滝

以外なかった。

アリサが滝の方に向かって歩いていったのできょろきょろとさがしまわっていたほかのメンバー

はあわててアリサについていった。

滝はとても大きく、流れる水の幅が十メートル以上ではないかと推測されるほど大きい。

滝の裏側にはディアルガとパルキアらしきポケモンが左右に石の扉に彫られていて、

中央にはギラティナらしきポケモンが彫られていた。

ディアルガの胸部分、パルキアの肩の部分、

ギラティナの腹部に何かをはめるためのくぼみがあった。

大きな石の扉を見て全員がその壮大さに目を奪われた。

己の信条を灯火に闇夜を往く

「愁」

「わかっているさ」

ツーといえばカー、あうんの呼吸の言葉通りに

多くの死線と修羅場を共にくぐり抜けたアリサの言いたいことが愁にはよくわかっていた。

ふところから表面がつるりとした白い宝玉のようなものと

ダイヤモンドのような荒削りな宝玉のようなものを背負っていたリュックからとりだした。

表面がつるりとしたほうをパルキアの方のくぼんだ部分に。

荒削りなほうはディアルガの胸のくぼんだ部分に。

はめるとカチリと音がしてぴったりはまった。

そして、黒衣の今回の依頼人の方をよろずやメンバーはふりかえってみつめた。

まるで依頼人のアストに何かを期待するように。求めるように。

「おみとおし・・・か。鋭いな」

依頼人が自虐的に、諦観ぎみにつぶやいた。

携え往くは決意の剣（つるぎ）と鋼の信念

「ほらよ、はっきんだま。これでこの扉は開く」

「これでやっと奥へ進めるな」

無造作に投げられたプラチナの金属塊を巽が受け取って扉にはめ込む。

はめ込んですぐに地面からかすかな振動を感じ取ったアリサがとっさの判断を下す。

「離れて・・・来る」

数秒後、地響きがした。

地震だと勘違いするほどの振動で気構えていなかったミシェルが慌てた。

「え？うそ？！」

「ミシェル、危ない」

冷静に事構えていたノエルがミシェルが転ばないようにと腕をつかんだ。

扉が開ききると地響きもやんだ。

「よし、いくか！」

「そうね」

意気揚々としている巽がさらに意欲を見せた。

静観していたアリサが淡々と事をすすめる。

扉の向こうには黒々とした穴が顔を見せていた。

この痛みを乗り越えて

その後風化や地底湖の水流の侵食などで
進むには困難な道をポケモンと力を合わせて、
依頼人アストの持つ地図にかかれた最奥の部屋に到達した。
そこには昔の金貨や銀貨や財宝が所狭しと詰め込まれていた。
アリサたちは自分が持てて、
移動の際に苦痛にならない程度なら持って行ってもいいだろうと相談して決めた。
それはだいたい一人当たりその人の両手のひらに乗るほどの量。
それでも財宝の山からすれば蚊に刺された程度でしかなかった。
「それにしても・・・これほど竜皇国がためこんでいたなんてね」
「俺だって驚いたさ。あんなのがあったなんてな。
さぁて、このお宝を持って帰ったらさっさとブラックマーケットに流すか」
意気揚々と、でも盗掘者などの外敵に警戒しながら元きた道を歩く。
先頭は琥珀色の瞳を輝かせた依頼人。其の次はミシェルとノエルが

続き、

アリサが警戒を怠らずに歩き殿(しんがり)、

つまり最高尾は愁がつとめた。

神殿から出て一行がほっとした瞬間にアリサが異変を感じ取った。

「・・・おかしい」

誰と血濡れのワルツを踊ろうか。

「・・・おかしい。静かすぎる」

もうすぐで遺跡を出るというところでアリサが立ち止まった。

アリサたちが入る前の遺跡の入り口付近はやせた土地ながらも

野生のポケモンたちはのびのびと生きていて、とても騒がしかった。

なのに、今はその気配すらもない。したくもない予測をしてしまい、

最悪の場合の予測が頭をよぎる。

無意識にアリサの手は右太もものベルト状のホルスターに収納して

いる銃にかかる。

服の下の腹部に巻きつけたベルトのモンスターボールホルダーのボ

ールが

カタカタと小刻みに揺れて、アリサの嫌な予感が本当で有ることを

告げる。

「アリサ」

ここで全員が異変に気がついた。そっと愁が確認するように声をか

けた。

「わかってる」

ついには銃を出して安全装置がしっかりかかっているかを見て前を向く。

そして一歩を踏み出して遺跡の外に出る。

「大丈夫だから・・・絶対大丈夫だから」

かすかにアリサの声が震えていたことはアリサ以外全員が知った。

花を君に捧げよう（前書き）

この話は飛ばしても問題なし。
作者がカンを取り戻すために書いた習作です

花を君に捧げよう

耳をそばだてると複数の人の気配と声、
それに遺跡付近の荒地には生息しないようなポケモンたちの鳴き声が聞こえた。
ほかには、鳴き声をかき消しそうなくらいの大きな羽ばたきがした。
落ち着いて冷静になったアリサは
空中にとどまっているポケモン対策にドンカラスのヤタガラスを、
地上のポケモンにはブラッキーのミコトをボールから一度に出す。
ここから無事脱出するための作戦を練る。
あくまでも、戦う方向ではなく仲間の身の安全第一と考えていた。
なんども頭の中でシュミレーションを繰り返し、
己の相棒を数度見てから覚悟を決めて飛び出した。

君に捧ぐ歌の名は

アリサの目の前には約七十名が待ち構えていた。

約半数は空を飛べるポケモンで空中にとどまり、残りの半数は地上で。

無意識に舌打ちして、トランシーバーのスイッチを入れてアリサは淡々とこう告げた。

「プランE。自己の命最優先で」

ノイズ混じりで若い男の声で返事が返ってきた。秋月愁だった。

「了解。それじゃあ、またあとで」

「ええ、またあとで」

通信が途絶えるとウェストポーチにしまって前を見た。

以前であった記憶が真新しい、

バラをあしらった黒いドレスハットに黒を基調とした白のレースがアクセントとなった

ゴスロリのドレスの黒髪ツインテールの少女、アガレスと対峙する。

ツインテールの少女の顔右半分には黒いベールがかかっており、

顔はよくは見えないが静かにアリサを見つめいていることはわかっていた。

アガレスの仲間らしき集団は静観をするつもりなのか、動かなかった。

アリサは真横にヤタガラスを待機するように指示して、防御力の高いミコトを前に。

アガレスは何も言わずにゴージャスボールからミロカロスをだした。

暫くの間、動かずにどちらも様子を伺っていた。

荒地の枯れ草が風に舞い上がって地に落ちた瞬間に動きがあった。

一つ、約束をしようか

ーー遺跡内Ｓｉｄｅーー

ノイズ混じりのトランシーバーからアリサの静かな淡々とした声を聞いた

愁(しゅう)は苦い顔をして電源を落とした。

「オイ！逃げるぞ！訳の解らん追手が入口前にいるらしい」

「え？お姉ちゃんはどうなるの？ねぇったら！聞いてるの？！」

「仕方ないだろ！俺たちが生き残って依頼人を無事に送り届けるんだ！

これは命がかかった仕事だ。子供のやる探検ごっこじゃない」

そのことを聞いて青ざめた顔をして、

気が動転したミシェルが愁に詰め寄ってつかみかかろうとした。

「・・・ダメ」

それまで一度も何も言わなかった黒尽くめのノエルがミシェルをとめる。

そしてゆるく頭を左右に振った。

その意図を理解したミシェルがしかたないとつぶやいて、
真新しいプレミアボールをベルトのボールホルダーからだす。
そしておもいっきり遺跡の広場のようなところで投げた。
ボールからでてきたのは無表情で物静かなネイティオ、
通称「トゥートゥー様」だった。
「トト、テレポート」
静かにミシェルは決断した。
ここに留まっているよりも無事に脱出することが姉の望みだとわかったから。
トトと呼ばれたネイティオはコクリとうなずいてバッと翼をひろげた。
眩しい光が辺りをつつんだ。
光が消える頃にはもうだれもいなかった。

一つ、約束をしようか（後書き）

なんで「俺の屍を越えてゆけ」的な展開になったのか不思議

賭けるモノ、差し出すモノ

「これはどういうことかしら？」

辺りを見回して、驚いた素振りを見せて相手の反応をうかがうアリサ。

いまだ警戒を怠らずに観察を続けようと判断した。

背中で腕を組み、

さりげなく袖の中に隠したモンスターボールを左てのひらに落とす。

「暁の旅団、序列第二位『アガレス』の名において今ここに宣言する！

・・・わたしたち、暁の旅団（あかつきのりょだん）を敵に回したからには、

ゆるさないんだからね！！」

怒り心頭とばかりに心情を顕にする彼女を見ては、

これはまた厄介なものに目を付けられたものだと内心自嘲気味に笑う。

いつもの無表情は顔で冷ややかな声色を保ったままアガレスにたずねた。

「アナタたちは何が目的なのかしらね」

待ってましたとばかりにアガレスが胸を張って自信げに答える。

「そりゃあ・・・アレ？ボスのバアル様から聞いてないや。

まぁ、とにかく！目的のためにはアンタたちは邪魔なの！消えてもらうから」

本末転倒な様を見て他の下っ端たちはあきれかえる。

今がチャンスと判断したアリサは、ブラッキーのミコトをボールに戻して、

てのひらのなかのモンスターボールを投げる。

「地走（ちばしり）」

ボールのなかから出てきたのはカバルドン。

名前を呼ばれたことで己の使命を感じたのか一声、吠えた。

激しい砂嵐がその場にいた全員の視界を遮った。

「え？何よこれ！ずるいじゃないの！」

喚くアガレスを放置しカバルドンをボールに戻してウェストポーチにしまうと、

ドンカラスのヤタガラスに捕まって飛び立った。

連中の誰かが起点をきかせてあまごいで砂嵐を消した頃にはもういなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3074n/

煌く星々を探して。

2011年9月15日11時45分発行